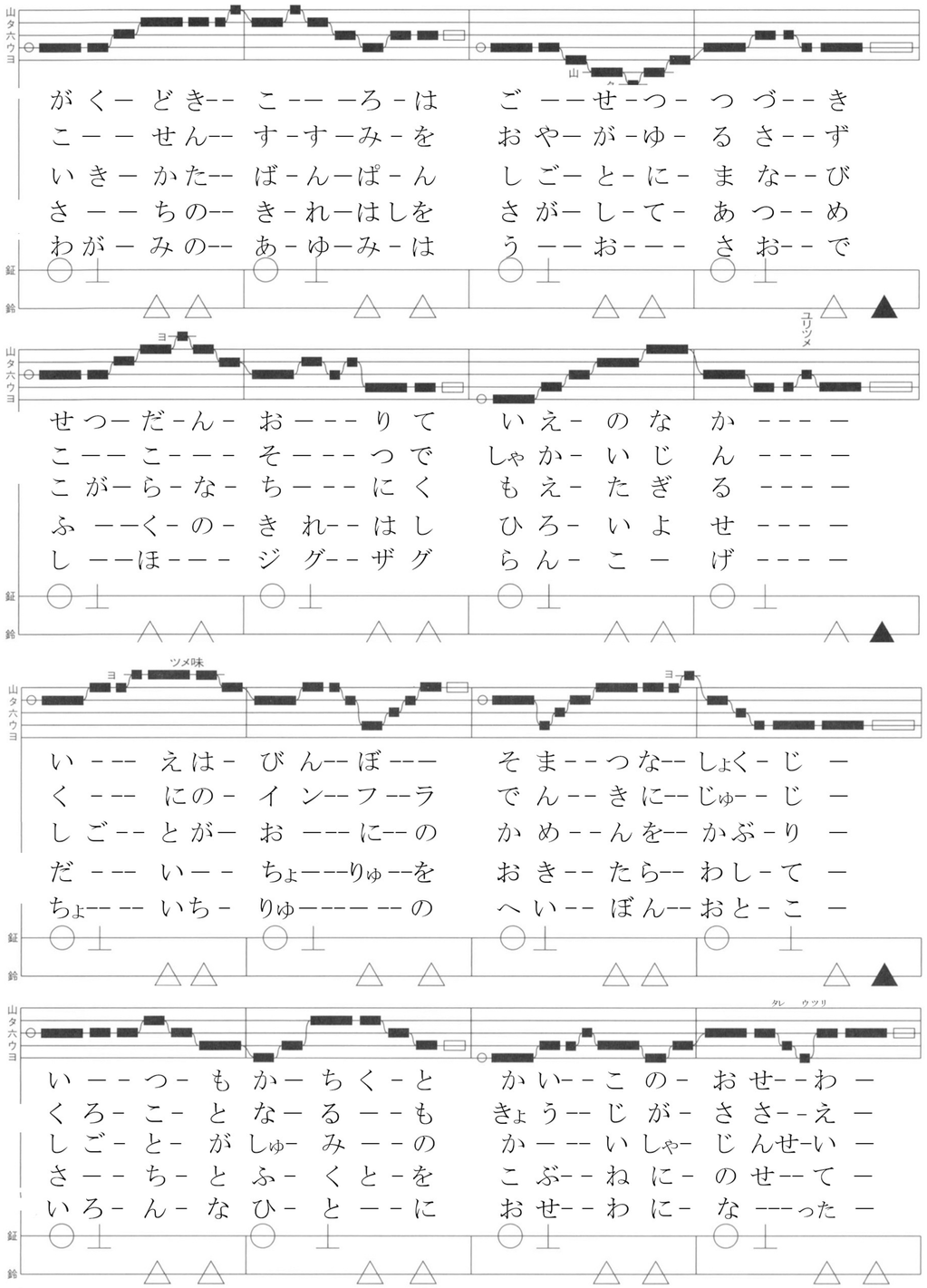
K01　私の凸凹半生－和讃

（原曲「夢和讃」）

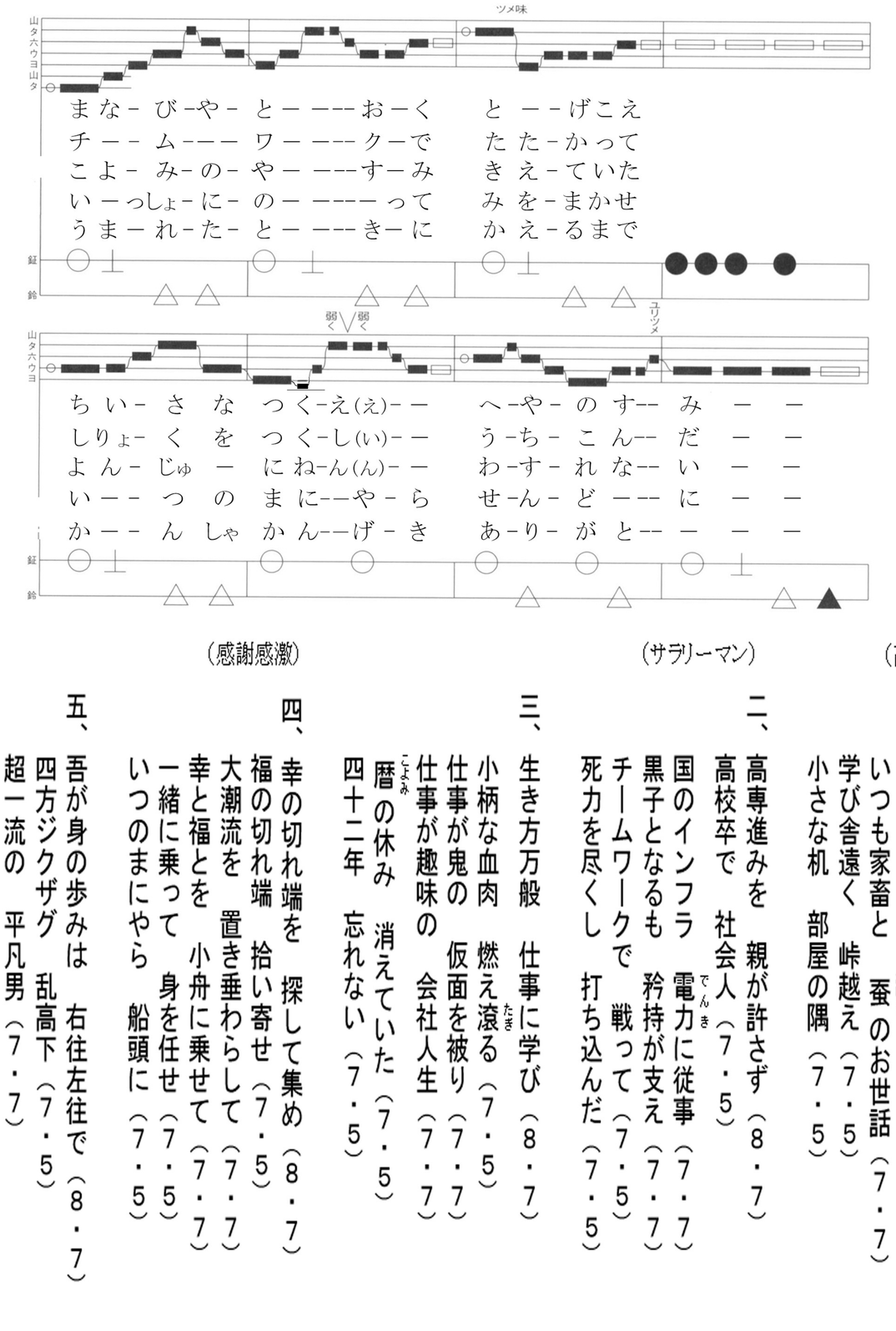


（注1）楽譜・原曲は福聚(ふくじゅ)教会叡山流詠歌和讃音譜集に掲載

（注2）替え歌の詩(短歌・和讃)は大沼香作　2015(H27)年6月6日（土）

（短歌）仕事から　社会万般　教わった　吾(われ)が砂粒　国家の土台

（短歌）ここにいて　素性分らぬ　ものなれど　大空泳ぎ　尾煙を残す



（高校卒まで）

一、学童期頃は　豪雪続き（8・7）
雪段下りて　家の中（7・5）
家は貧乏　粗末な食事（7・7）
いつも家畜と　蚕(かいこ)のお世話（7・7）
学び舎遠く　峠越え（7・5）
小さな机　部屋の隅（7・5）

（サラリーマン）

二、高専進みを　親が許さず（8・7）
高校卒で　社会人（7・5）
国のインフラ　電力(でんき)に従事（7・7）
黒子となるも　矜持が支え（7・7）
チームワークで　戦って（7・5）
死力を尽くし　打ち込んだ（7・5）

三、生き方万般　仕事に学び（8・7）
小柄な血肉　燃え滾(たぎ)る（7・5）
仕事が鬼の　仮面を被り（7・7）
仕事が趣味の　会社人生（7・7）
暦(こよみ)の休み　消えていた（7・5）
四十二年　忘れない（7・5）

（感謝感激）

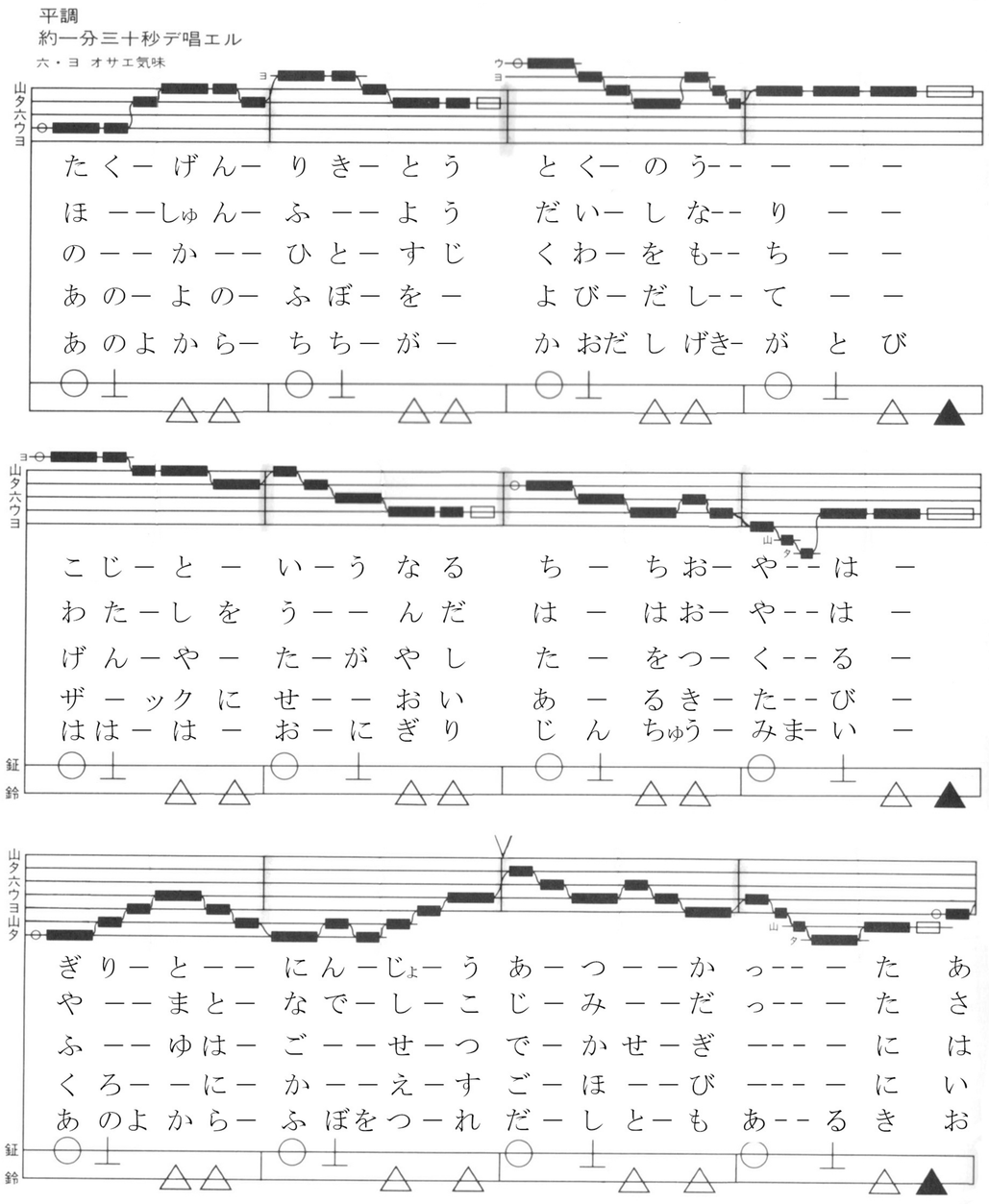
四、幸の切れ端を　探して集め（8・7）
福の切れ端　拾い寄せ（7・5）
大潮流を　置き垂わらして（7・7）
幸と福とを　小舟に乗せて（7・7）
一緒に乗って　身を任せ（7・5）
いつのまにやら　船頭に（7・5）

（感謝感激）

五、吾が身の歩みは　右往左往で（8・7）
四方ジクザグ　乱高下（7・5）
超一流の　平凡男（7・7）
色んな人に　お世話になった（7・7）
生まれた時に　帰るまで（7・5）
感謝感激　ありがとう（7・5）

K02　吾が亡父母思い出－和讃

（原曲「父母の恩供養和讃」）



(注1)楽譜・原曲は福聚(ふくじゅ)教会叡山流詠歌和讃
音譜集に掲載

(注2)替え歌の詩(短歌・和讃)は大沼香作
2015(H27)年6月6日（土）

（短歌）

田畑での　亡父母(ぶも)の背中が　懐かしい　日の出を拝し　日没送る
在りし日の　父の口癖　思い出す　鍬(くわ)が友達　星空相手

拓原力斗篤農(たくげんりきとうとくのう)　居士(こじ)というなる父親は
義理と人情篤かった　熱い真夏に目を閉じた
芳春富耀大姉(ほうしゅんふようだいし)なり　大香(わたし)を生んだ母親は
大和撫子(なでしこ)地味だった　寒い真冬に目を閉じた
農家一筋鍬を持ち　原野耕し田を造る
冬は豪雪出稼ぎに　母が一時の世帯主
あの世の父母を呼び出して　ザックに背負い歩き旅
苦労に返すご褒美に　今世の姿お見せする
あの世から　亡父(ちち)が顔出し　檄が飛び
亡母(はは)はおにぎり　陣中見舞い
あの世から　亡父母(ふぼ)を連れ出し　共歩き
幼き頃の　苦労が話題

K03-1　吾が懐古から未来へ－歌謡曲

（原曲「サライ」）

一、　甦（よみがえ）る、淡い夢が揺れながら溶ける
　通学は、ガタガタ道を自転車と歩き
　帰り道、峠越えにまん丸な夕陽
　時々のバスや列車はうたた寝の夢中（ゆめなか）
　写真・・・（次頁ａへ）

二、辛（つら）かった、期限厳守宿題の仕事
　寝なかった、明日の朝まで満点を目指し
　押し寄せた、盛りだくさん隙間なく次が
　難しい身の丈超えた未体験の仕事
　熱く・・・（次頁ｂへ）

（高校時代）

三、奇遇だね、出会いの事、私（わたくし）とみんな
　驚きね、生きている事、ときめきの鼓動
　不思議だね、喜怒が渦（うず）き涙目に笑顔
　すばらしい、頭の中が宇宙を駆け巡る
　予見・・・（次頁ｃへ）

（会社時代）

（注1）音符直下の歌詞は「サライ（歌唱－谷村新司＝作詞、
　　加山雄三＝作曲）」の一番目の歌詞
（注2）替え歌の詩は大沼香作　2015（H27）年6月6日（土）

K03-2　（吾が懐古から未来へ）

（注1）音符直下の歌詞は「サライ（歌唱－谷村新司＝作詞、加山雄三＝作曲）」の一番目の歌詞　　（※）最後の繰り返し
（注2）替え歌の詩は大沼香作　2015（H27）年6月6日（土）

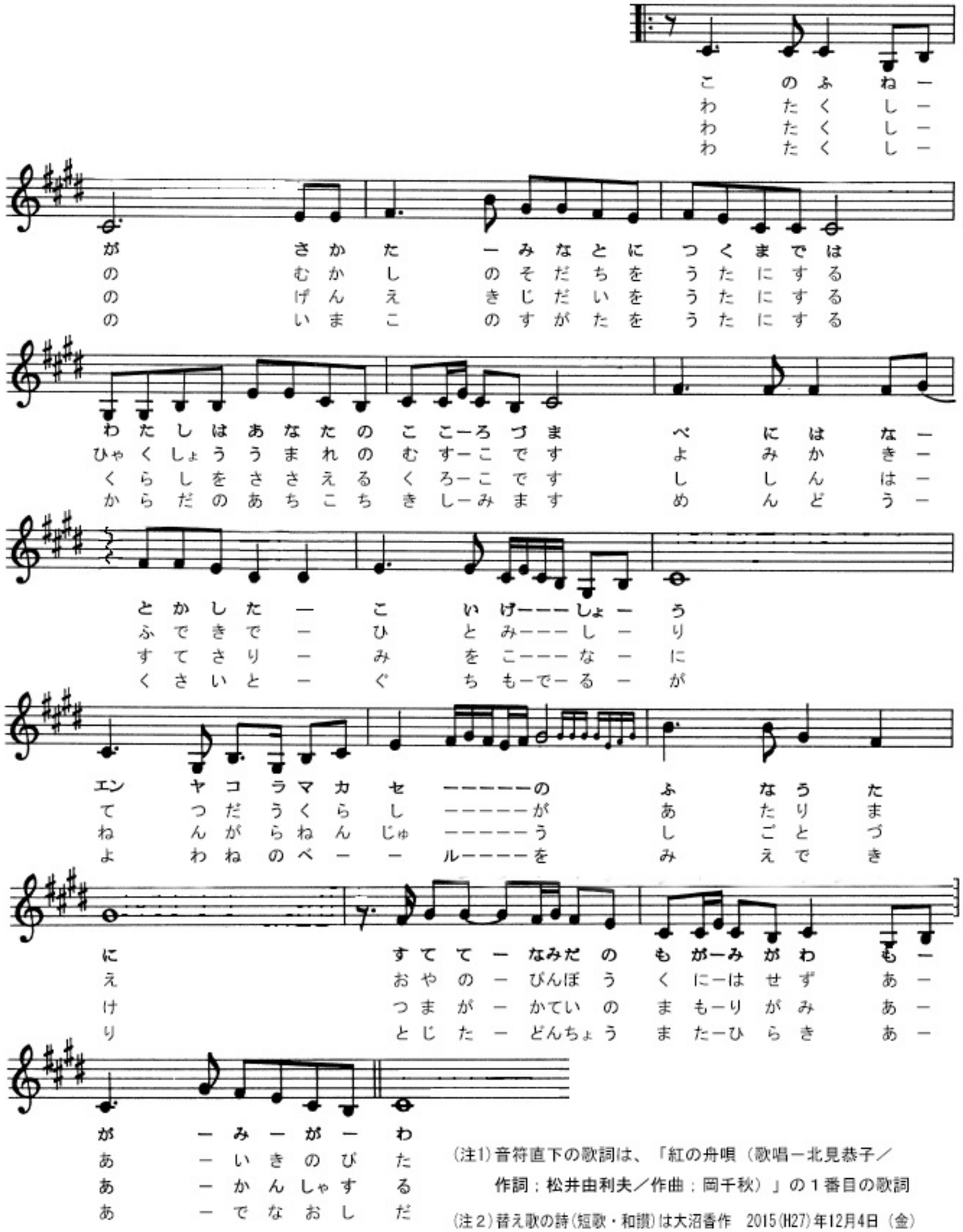
（a）写真（しゃしん）めくった右のこの人
すれ違ったあの街角でそっと手を取り
密かな想いの初恋の人
懐かしさが蘇（よみがえ）って胸が震える

（b）熱く（あつく）語った国の繁栄
小さくとも矜持を持ち努力傾け
仕事が教師と攻守を学ぶ
今に生きる我慢強さをみんなに感謝

（c）予見（よけん）を持たずに色んな人と
会って見たいと心開き歩き尋ねて
貴方が欲しいと情けが燃える
花の薫（かお）り、夢も希望も全てが欲しい

K04　吾が生涯の短編小説

（原曲「紅の舟唄」）



(注1)音符直下の歌詞は、「紅の舟唄（歌唱ー北見恭子／作詞：松井由利夫／作曲：岡千秋）」の１番目の歌詞

(注２)替え歌の詩(短歌・和讃)は大沼香作　2015(H27)年12月4日（金）

一、私(わたくし)の（５）
昔の育ちを　歌にする（８・５）
百姓生まれの　息子です（８・５）
読み書き不出来で　人見知り（８・５）
手伝う暮らしが　当たり前（８・５）
親の貧乏苦にはせず　ああ生き延びた(7・5・7)

二、私(わたくし)の（５）
現役時代を　歌にする（８・５）
暮らしを支える　黒子です（８・５）
私心は捨て去り　身を粉に（８・５）
年がら年中　仕事漬け（８・５）
妻が家庭の守り神　ああ感謝する(7・5・7)

三、私(わたくし)の（５）
今この姿を　歌にする（８・５）
体のあちこち　軋(きし)みます（８・５）
面倒くさいと　愚痴も出るが（８・６）
弱音のヴェールを　見得(みえ)で切り（８・５）
閉じた緞帳(どんちょうまた)再開き　ああ出直しだ(7・5・7)

K05　今の私の内情は

（原曲「山形県民の歌」）

大香（わたくし）のブランド容姿は老木に桜吹雪で紅葉（もみじ）を染める
毎日が命を閉じる前稽古　演ずる舞台を豪華に飾る
問いかける吾の人生どう描く　宇宙と対話　思うが儘に
人生の縦横糸を夢で編み　丸く作って花火に乗せる
内情は私（わたし）心（ごころ）の清濁を　棒でかき混ぜダイヤを作る
この歳は洟（はな）垂れ小僧の真っ盛り　まだまだまだよ修業が足りぬ

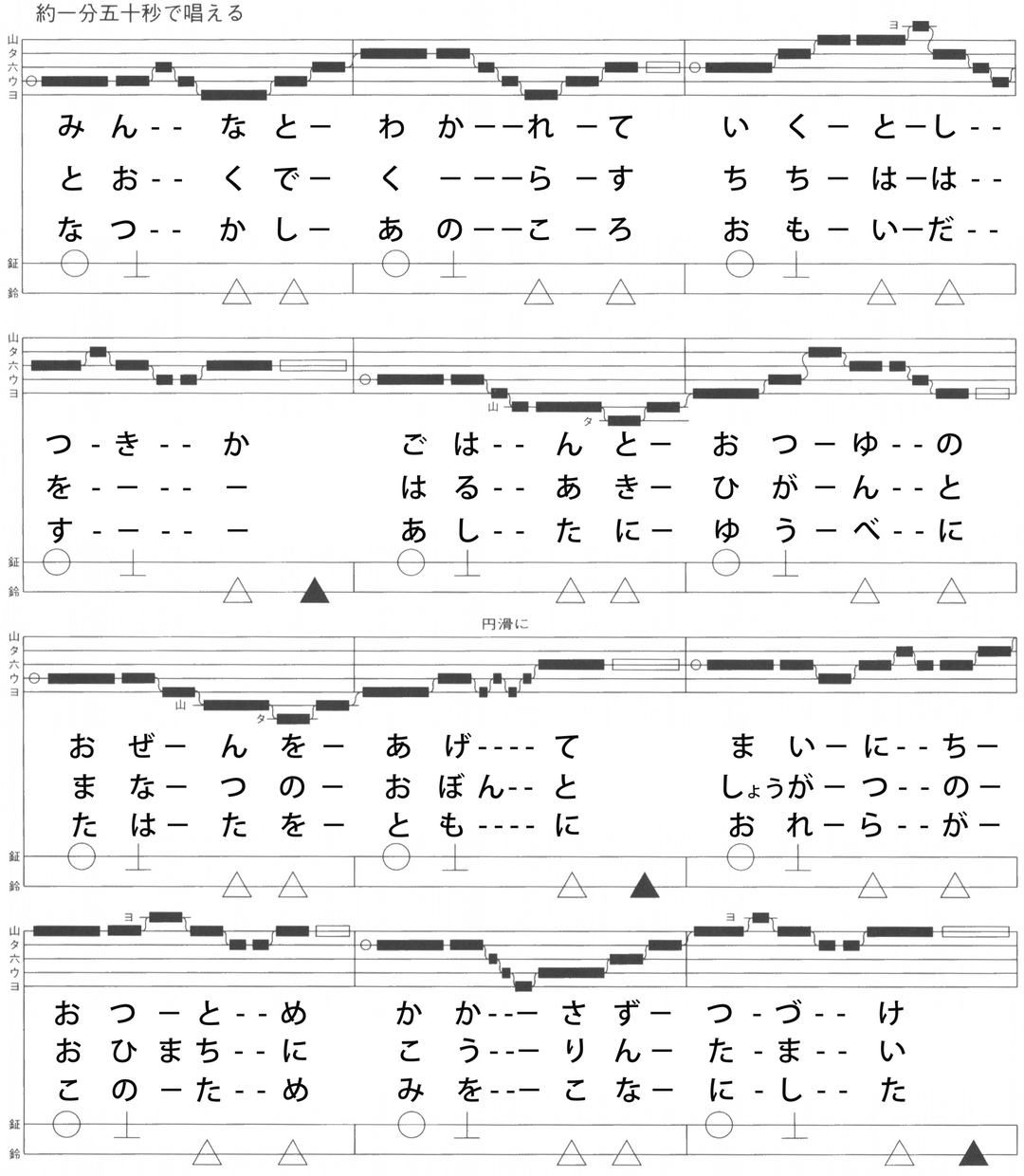
（山形県民歌の歌詞）
広き野を　ながれゆけども　最上川　うみに入るまで　にごらざりけり

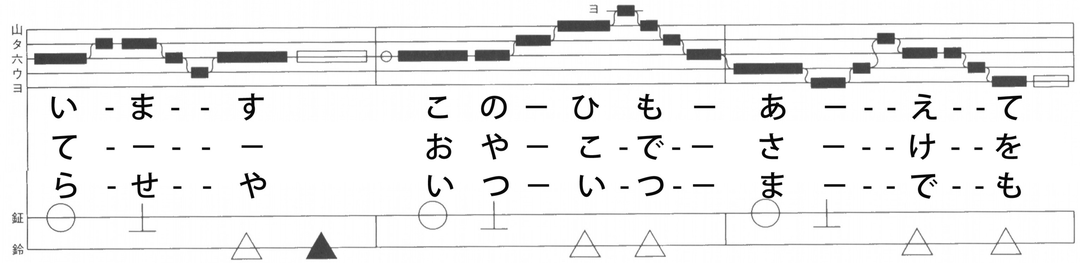
（注1）;この楽譜は、山形県ホームページに掲載の山形県民歌より抽出
（注2）;楽譜直下の歌詞は　最上川の1番の歌詞
（注3）;替え歌の短歌は、大沼香作　2015(H27)年6月6日（土）

K06　亡き父母を慕う(和讃)

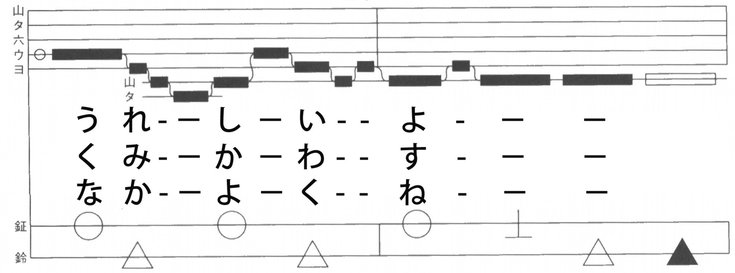
（原曲は「来迎会の和讃」）

平調
約一分五十秒で唱える





ユリツメ　ユリツメ



一、亡父母（みんな）・義父母と別れて幾年月か
ごはんとおつゆのお膳を上げて
毎日、勤行（おつとめ）、欠かさず続け
心経（しんぎょう）と祝詞（のりと）も捧げています
この日も会えて嬉しいよ

二、遠くで暮らす亡父母（ちちはは）・義父母を
春秋彼岸（はるあき）と真夏のお盆と
正月のお日待ちに
降臨賜（たま）い
山海幸（やまうみさち）を飾り立て
親子で酒を汲（く）み交（か）わす

三、なつかしあの頃思い出す
朝（あした）に夕べに田畑を友に
おれらが子のため
身を粉（こな）にした
亡父母（おやじょ）・義父母（おふくろ）達者で暮らせや
いついつまでも仲良くね

(注1)楽譜・原曲は福聚(ふくじゅ)教会叡山流詠歌和讃音譜集に掲載
(注2)替え歌の詩(和讃)は大沼香作　2018(H30)年1月24日（水）～亡父母の13回忌法事記念

K07　大香(わたくし)のこの歳の生き方

［原曲「大志（こころざし）」の替え歌］

1．群(ムレ)れに入らず　（グループ）に組みせず

孤立・孤独を　恐れない

俺と皆(みな)とは　違うじゃないか

俺に“独(こ)”を立て　“個(こ)”を磨く

夢を仲間に　吾が道を

しがらみ　－　作らない

2．今の私は　たかが砂粒

檻(おり)に囲まれ　もがいてる

自問自答で　探して見れば

ここに両親(良心)の神(かみ)・仏(ほとけ)（真我）

畏(おそ)れ畏(おそ)れよ　謙虚なれ

慎(つつし)み　－　忘れない

3．出会いは巡るが　これが最後と

一期一会の　華(はな)祭り

今日の一日　貸し借りせずに

今日を中締め　幕を閉じ

今日が最高　さようなら

別れを（が）　－　美しく（い）

※1；五線譜直下の歌詞は、原曲－（歌唱；坂本冬美／作詞；たかたかし／作曲；市川昭介）の1番目の歌詞

※2；替え歌の詩は大沼香作　2018(H30)年6月30日（土）

K08　「独華（こか）」ーひとりばなーが散り逝く

（原曲「長崎の雨」の替え歌）

※1;楽譜直下の歌詞は、原曲ー(歌唱;川中美幸／作詞;たかたかし／作曲;弦哲也)の1番の歌詞

※2;替え歌の詩は大沼香作　2018(H30)年6月30日(土)

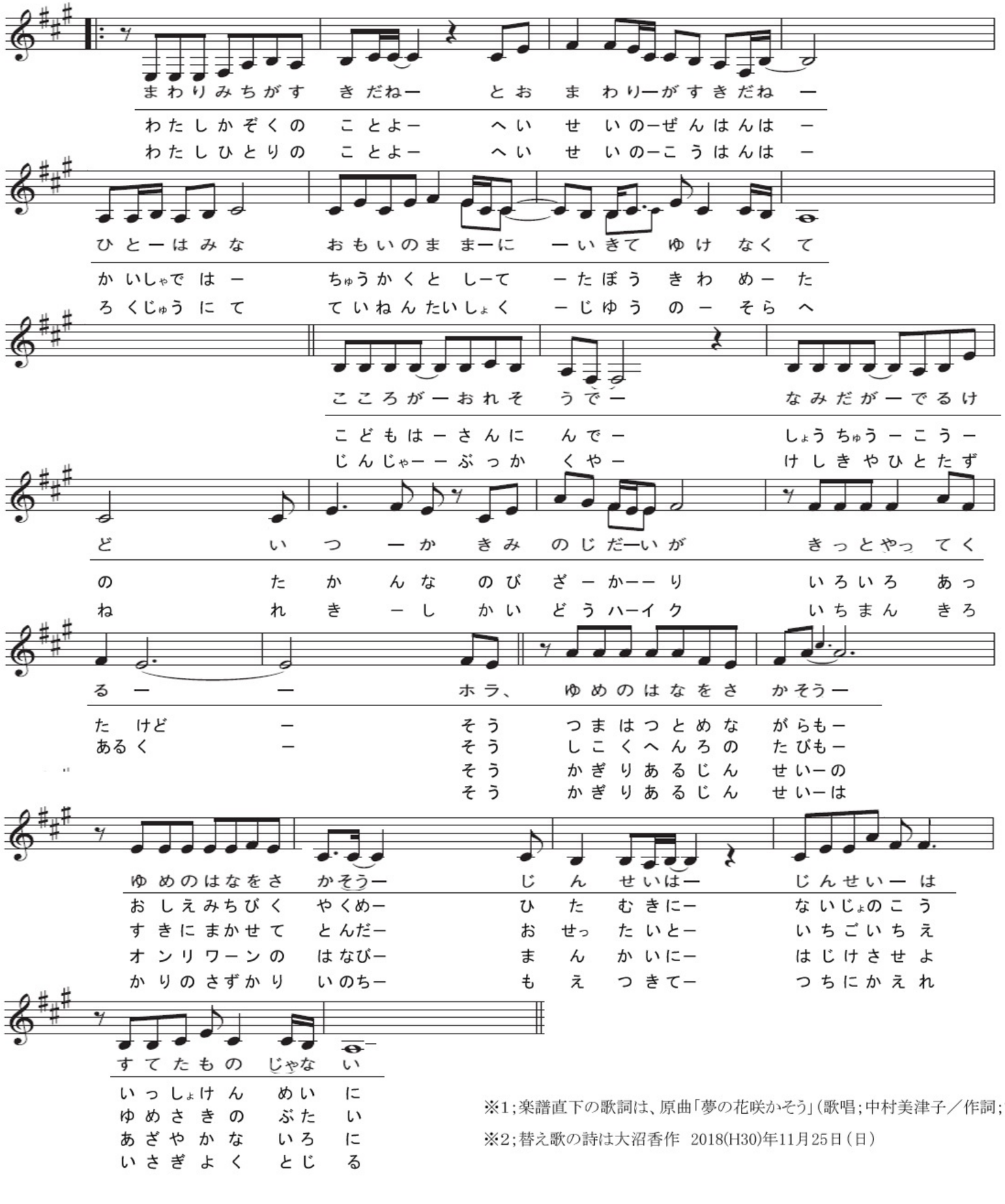
1．一つの身(からだ)は七色模様で
甘(あま)くて塩辛(しおから)の稀(まれ)な味
時おり奇妙な光や音が
触(さわ)って見れば赤子(あかご)の匂い
謎の姿よ何ものか
それは俺だよ独り華(はな)”が咲く

2．左か右かな自由自在で
常の視線は定まらぬ
だけど事あらば魂(たましい)うずき
たとえ、火の中水の中
どこかチグハグ何ものか
それは俺だよ熱く燃えるのさ

3．盛(さか)りを惜しまずポトリと落ちる
椿(つばき)の如くに潔(いさぎよ)く
三世（注１）を見護(みまも)る神はどこか？
菩提(ぼだい)（注２）に住まう仏(ほとけ)を探し？
イエスキリスト（注３）主(しゅ)よいずこ？
皆(みな)を訪ねて俺は独(ひと)り逝(ゆ)く

（注１）過去世・現在世・未来世、親・子・孫のつながりをいう。
（注２）煩悩を断ち切り悟りを得た無上の境地をいう。
（注３）あらゆるものを包み込むこの宇宙の創造主をいう。

K09　『平成』時代の大香(わたくし)の半生



（原曲は「夢の花 咲かそう」の替え歌）

1．大香(わたし)家族のことよ、平成の前半は
会社では中核として多忙(を)極めた
子供は三人で小中高の
多感な伸び盛り、いろいろあったけど
そう、妻は勤(パートも)めながらも教え導く役目
ひたむきに内助の功、一所懸命に

2．大香(わたし)一人(ひとり)のことよ、平成の後半は
六十歳(ろくじゅう)にて定年退職自由の空へ
神社・仏閣や景色や人(を)訪ね
歴史街道ハイク、１万キロ歩く
そう、四国へんろの旅も好きに任せて飛んだ
お接待と一期一会、夢咲きの舞台

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（※１）そう、限りある人生のオンリーワンの花火
満開に弾(はじ)けさせよ、鮮やかな色に
（※２）そう、限りある人生は仮の授かり命
燃え尽きて土に還れ、潔(いさぎよ)く閉じる

※1;楽譜直下の歌詞は、原曲「夢の花咲かそう」(歌唱;中村美津子／作詞;たかたかし／作曲;弦哲也)の1番の歌詞

※2;替え歌の詩は大沼香作　2018(H30)年11月25日(日)